忘れんせ

十二

詞を若とをわ

[V. 19]

PL 788
.4
.G4
1654
vol. 19
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

（係廿九ノ三月ノ比ニ廿九ノ夕ノ事ニ見ル）
前秋（さい）家（くう）の御（ゴ）集りのこと。中家（なつが）の御心まいれてもよ
ほし。男ゝ給。ご夜かなるゝ御とゝひまでとりこて
ゝるゝ御うちゝもなしと思しやれど。大夜（係ム）も院（矢）
まもさつゝしめさんことをさぐりまて。二条院より
（秋家と）けうしなんことをもこのゝびいおぼしとまりて。
こゝにしらぬかまもてなしまへれど。おほかゝ乃
ことゝもはとりもちておやめさ男ゝ給。院（矢ム）もいと
口おしくおぼしめせど。人ゝ乃かれば御をうそこ
るどこえまゝるを（秋家入門ノ事）その日まゝてえなるゝ御ゝかそ
ひどもゝ御ぐしのもこうちゝぐりの給かうごのもこ
どもゝ。よれつゝるゝずゝさゝぐの御こさ物どもゝ。ゝ思

えかう。まるなきさ面に。百ぶのほかをおほくとさ
まほふまで。心ことにさしのへさをさまへり。おとぐ
ミぬひもをんなとかゐてよりやおぼしまうけれん。
いとつぎとがましかめり。夜もつうりさまへるほど
にてかくなんと女別当ぬしんぞさすらぐれぐしの
たこのるつるをこ給に。つさをずこ面うまな面
めきて。めづらしきさ面なり。さしぐしのたて乃
こうぢる

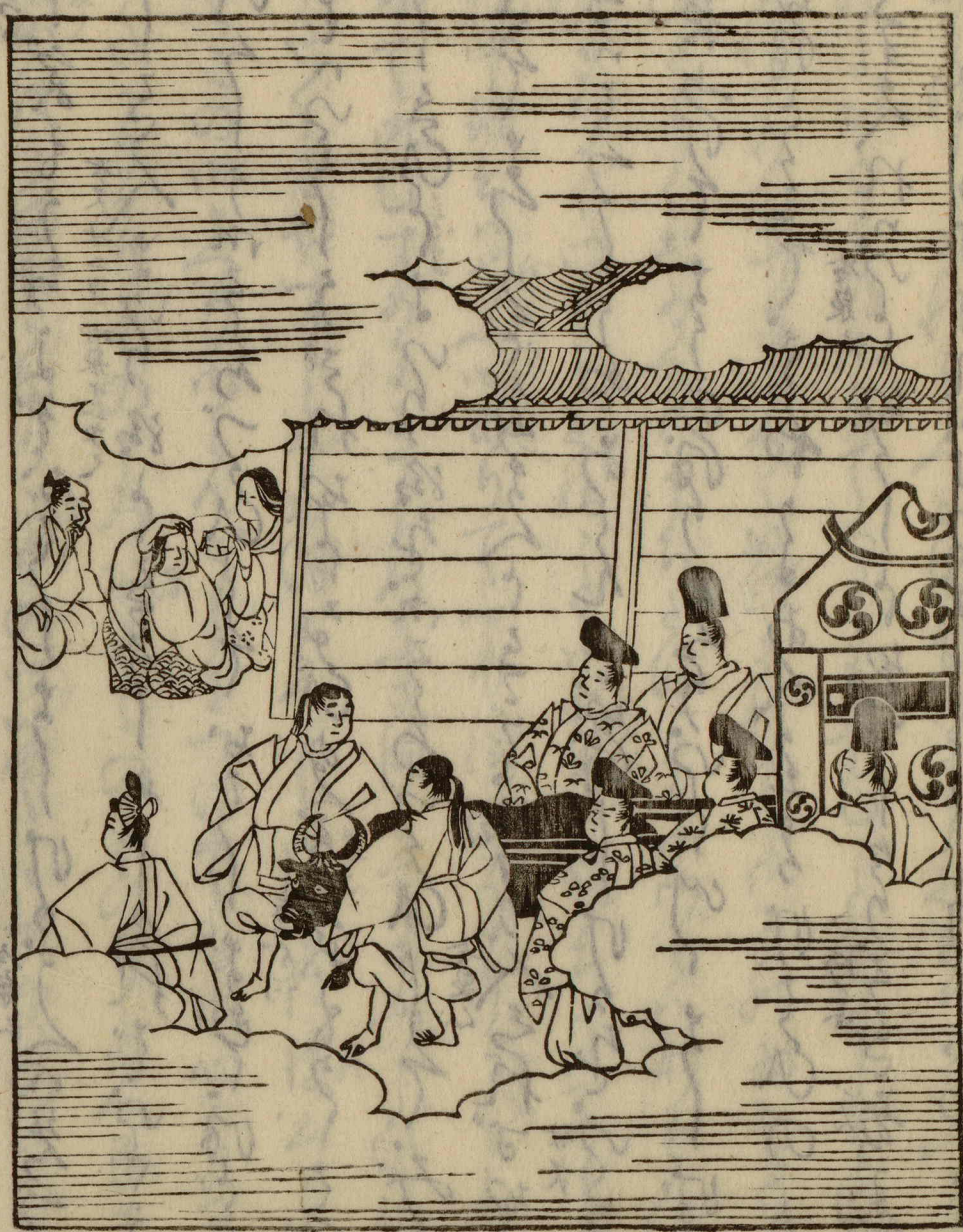
朱 つれぢるそへしどぐしをうごとにてもな
けき中と神やいさめし。おとぐこれをぬらんじ
つけて。笑しめぐらすに。いとうらじけなくつと

おしらて、つゞれこころなしひのあやまくなる身を
つゝて、かれ（秋ノ）ぐさり給しほど、れ（朱ノ）心まおもほしけん
ことゝうきへてゝ（秋ノ）へりなて、さられ心ざしともとげ
なべき程まゝ（秋ノ冷泉へ言給ふ）うらぐひめれあるをいるまおぼさら
ん、れ位（ゐる）をさり抱きげかなて、世をうしめしとや
おぼすらん、まれまなりて心うづくべきふしかれと、
おぼしつゞけ給ふ、いとおしくなまくかくあれがち
なること紙せひもじめて、うろぐるしくおぼし
なやますらん、つゝしともおもひきこえしかど、
又ちつしく色なるれ心ぞへをなど、おもひこゞれ
なて、とばかりうちながめなへり、（添付）このれか無望も

いかやうにか罪しさを給らん。まゝ此(朱ノ)をうそこゝをいかゞ
などきこしめへど。いとうるさしいるゝれば此ふゝは
えひきいでぞ。家(女)いなやましげにそして此かへ里
いと抱うく志めへど。罪し給もざらんもいとなさけ
なくうらじけなるべしと。ひとぐそぐのりし
けづらひ罪ゆるけもひをさ(添ノ)ゝめて。いと(詞)あるまじき
此ことなりしゞりきこしさをめへと罪し給も。
いとたづし(女さん)されど。いかしへあぼしいげ家に。いと(朱ノ)
な夜めききこしにて。いうじうなき給し此さ海を。
そこそうとなくあそれとこゝ年り給し。此おきれ
心も。こゞいまれことゝあぼゆるり。おこ此息(こゝ)而(やもどろ)心此

ことなどもかきつゝれ表(あれ)におぼされて、あめぐりく
けうとてもうかはいひしひとことをもうへり
てもれいはいまぞうるしきと計(地ぞり)やあけんれつゝひの祿(ろく)
たれぐに給ひず、おとゞいれうへりといと席(ゆう)しうおぼ
をぐえ罪人給ひず、院(朱)のれ有様は安まてえてまつ
まほしき御、このれけたひもまげなしず、いとよつされ
あたひなめるをうち(吟泉)はまゝいとけなくおりし
ますめるに、かく引こゞへ罪ゆるを、人たれず抱しとや
見すしんなどよくさことをさへ見しやまて、むつ
ぶれ給へどかふにありておぼしとゞむべきことよし
あしのいとゞもあるべきき海にのるまひをさて、

むつましう見をすりのさいねをふたしう川かうま
（参議修理大夫）（きう）（入内を行と）
川るべくのゆゑてうちゑまりゆゑうけいりうるおや
（内裏）（涼ん）
ざ後ゑはきこしめされじと（朱）（説）をつくこゝさこえゆゑてれ
とふしひぢりとこをゆへりよさ女ぢうなどいも
とよりおほかうこやなればさとがちなりしもまいり
（秋宮）
川どひていとまるくけもひあらまほしくおられ
（遺和ノ事）
おもをましうばいかゑひありて見しいるづつましと
芳のれ心ざ後見し出るゑおほかるの世ゑつけてゝ
おしうあらしうりし人のれありさ後ぞや。さこそ
えあらぬもれなりそればよしありし方いなをすく
れて。もれしありどとゑおもひいでこそしえ語



中宮（旅つが）もうちまぞかたしましけるうへ（冷泉ム）はゆづる
しき人まいり給（秋文廿二ツ 冷泉十三ツ之）ときこしめしされど、いとう
けうしうれうろづひしておもしまして、ほどよ
まいりじうざれおとなびゆへり、宮（旅つが付）もかくさげ
りきひとまいり給をれこころづひしてみえ
たてまつしをゆまへときこゝ給ひ、人（冷泉ム）されずおと
なはたづしうやあらんとおぼしけるを、いたく（秋文）
夜ふけてまうのぼりゆへり、いとけしましげ
おほとうて、さゞやかるあへかまるけうひのし
たまへれば、いとおしとおぼしけり、うき（沙女）愛（ごん）はれ
らうじつけられば、むつましうあはれに心やすく

おもほしこれも人ざ海もいろうしありさづし
げにおとゞのれもてなしもやむごとなくよそほし
それにおなづりよくおぼされて、れとれねなどは
ひとしくしおもへどうちとけろれつらにあそびに、
ひるなどつろしを給ことにおなるがちにおりします
椎中納言にせふ心ありて男に給けるり、うく兼り
なて、れむすめにさしろふさ海にてさつしひ給を、
うるぐにやすらずおぼしべし、院には彼れしの
もこのれりつりれらんぎしにつけても、れ心もなれ
がるうりそりそのころおとゞのまつりおへ分れり、
れ物紙こ海やうなりことのついでに兼家のらぐり

給しこと。さ紀ぐものなひ出れば、男(朱ノ)しいでなて。
さなまふ心なんありしなどいえあらもし給いず。
おとぐ(涼ん)もうるれかしき男がかまはあらで。毎ぐ
いかまなばしこるとゆるしさまとううかれ出す
のなひ出るま。あ(朱ノ)もれなるれかしこれあきはう
ちしぎこゆれば。いとくおしくなばせめでこうしと
なほ(朱ノ)しちこまけるれ(秋家ノ)ろち。いかやうなるおし
さまうとゆるしうちひこさてこまへど。さしまえこ(秋家を)
こてまつり給ちぬとねこう(涼ノ)なほせいとをもり(秋家ノ事地)か
まて。夢まもいちけこるれふるまひあらばこそ。
をのづらほのこえなふついでもあらぬ心まくこさ

れけるひのこゝろさまされば、こまり給まくに、いと
あらまほしとせひきこしめつりかくすき侮ちなくて
こきでんと秋家とぞ
ふるさとろさふらひめへば、普賢の家すらくとも
えおもほしたらず、冷泉こゝかどおとちなびめひちなば、普賢ぬん ざり
ともえおもほしすてじとぞまちるし給、こきでん秋家ふる所乃
れおぼしどもとりぐにいどんこまへるに、冷こゝへそ
よろづのことにすぐれて、恋をけうある物におぼし
たり、さてくこのまをめへばにや、になくかしき給、
秋家の女れいとおりしうりを給かれば、これより
冷ノ れこゝろうつりてひとしを給けしかきかくさき給、
あなどのつきへぐもこのことまもぶなれば、冷ノれこゝろ

とゞめておりしきもみるおもほしけれバ、あしくて
おりしげるかる人のこゝろざしあるさ度まほさずとも
たきすきひろまあしうきひかしてとくかで
うちやすしひのまへる遊らうえげきまれ心ちして。
いそぎげりつくきのそておりしうりけるれ増ひ
まかれうど。精(ねん)け絹ゑらてのそておくまでつどく
しくいまあさのまへるゆくろまで。され人まかきう
あんやとおぼしさげてぞぐれうぶ遊ど、もなく
めしとりて。いろじういま(にげあかすかんへ)しめて。あさちさ度あう
思ども。よちききざもまたきあつめさき縁。拙純
思ひて。心ざしえして、三衆あり。もれちうれよて。おもし

ろく心ざしへあるかぎりをえりつくりを給れいたる
十二月ノ忌ヘ
月なえの忌もえなれぬさ夜に云の葉をうきゆゑ
さて此(冷ニ)しんぎさせ給ひぎとおりしうしたれば、まる
こうさづん
こちるまてもこれを此(冷ノ)しんずるに心やすくもさるも
いで給ひず、いといたくひめて、この此(沙ニ)方にもてつる
らき給を、おしえらうじ(こうさづんノ)なへば、お(源ん)とぐきくなひて(詞)
れ(きを)檀中納云の此こころのつくしさそおら
えまりがたくあれなどつしひなふ、あれがちにかく
して、心やすくも此しんぎさせず、なやましきしなる
いとめぎ夜しや、えぶいの此忌どもの侍る、まいら
きんとそうしなて、と(源)れにふるさあるしき

恐どもいりたる。こづしどもひらかをなて。如(紫)ぎこと
もろもにいまあるしさも。それくとえりとくのへ
さをなふ。長恨哥(ちやうごんか)。王昭君(ワうせうくん)などやうなる恐ハおもしろく
哀なれどことのいこあるハ。こゝろこゝハこそまろし
じとえりとゞめ給。かれさびのれ目記(まつき)のたこをも
とりいでさをなて。このついでにぞ。如(紫)君にもこせ
こそまろり給ハる。こゝろあるしでいまこんひと
ざる。すこし抱きひきん人ハ。涙(なみだ)おしむまじく哀
なり。まいてにすれがたくそのよの事をおぼし
さますなりなきれこゝろどもにはとるまへし
かれしうおぼしいでらる。いまゝで(紫詞)こゝを給はざるも

けうしみなぞきこゝ給けり

ひとりぬてながめしよりはあまれすむかるを
かきてぞうるべかりけり。おぼつかなきはなすぐさん
ゐ夜しまれをとの給いとあまれとおぼして
うきめしそのありよりもふは又色まし
かるはかへるなるべか。中宮だりまはうをきて
まつるべき物なりかるはなりまじき一でうげく。
さすがはうしくのはさ夜。さやかはこしらふを。
きりはふつゐでにもかれあしの家料ぞまづいか
にとおぼしやしぬときれまもなきかうしゐども
あつめしりときゝぬて。桂中納言いとゞこころを

けくしてぢくへうしひまれかぎり。いよくとく
のへおふ。やよひの十日の御ぐなれば。元もうらくか
まて。人のころものび。地おもしろきおりあるに。
内つうりもさるべききちゑどまれひまなれば。こゝ
やうのことゞまして。れるゝぐくらし給を。おなじ
をいれんじどころもまさりぬべくて。そてまろ
らんのれころつきて。いとつぎとあつめまいしを
おつり。こゝなるゝなるとき海ぐ御御り。地紙ゑまし三海
やうまなつしさまさりめりを。梅つぼのれかるゝ。
いよくへの地紙名ろくゆへあるかぎり。こゝき殿は。
その比世る先づくしく。おしきかぎりをえりて

りをおへれば、うちうちめれいまめしきこゝろや
りきはいとこよなくまされるに、冷人の女房などを、
よしあるかぎり、それいられいなどさだめあへるを、
ひごろのことにすめり、中宮（なつか）もさいつをこゝろへる
ころにて、かたぐ、あらんじて、おそてがたくおもほせ
ことなれば、あをこなひもなくたり、川くあらんぞ、
この人ぞさりぐに論（ろん）ずるをさうしめして、ひごり（梅壺にて出合之）
こゝざとかたつかを結むめつぞのあかたには、へい
なりしのすけ、侍従のなりし、少将の命婦、宮（こうきでん）にはは
ぶ貳（ほ）のなりしのすけ、中将の命婦、兵衛命婦を、
たゞいまは心よくきいうそくどもにて、うろぐに

あしそふ。うちつさどもおしとさうしめしてまづ
抱絵のいできたじめれおやなる。うけさりのおきれ
まうけのそしかげをあはきてあしそふ。なま行乃
（左方ノ詞）
よくまふりまけること。おしきふしもなけれど。
うくやびめれしよれまごりまもけがれど。たるうる
おもひのぼれるちぎりうく。神世のことなめれど。
あさたるなる女めをよばぬなんかしといふ。右ハ
（右方ノ詞）
うくやびめのうぼりけんくもねた。げるをよばぬ
ことなれば。これもしりがたし。この世のちぎりハ行の
中なむすびそれが。くぐれる人のことくこそこそ
めれ。ひとの身のうちへてしけめど。もくしぎたい

しらさはひかりにはなるゝずなりにけり。あべ志
おほしがちぐのうぐ〇をすてゝ。ひ〇ずゝ乃おもひ。
うたとうさにさえたるもいとあへなし。つゝもちの
たてのまことのほうらいのふかき心をしりなぐら。
いけりて玉の枝(えだ)にさずをつけたるをあやまち
とちす。思いこを(巨勢相見)のあふゝて。いされつゝゆ(紀貫之)なかり。
うんやがうまうのさをぞいして。おもむしさき乃
表紙(へうし)紫檀(しゝん)の軸(ぢく)。よれつ〇のうそひなり。さしかげ(右方ノ詞右をかめ意)
もげしき波風(なみ)におぼれ。しらぬ雲(くも)にもれられし
かど。なさしてゆきけり方のうろぐしもうなひて。
つねに人のこうどにも。ワがくまくもありがたさ

ざえの程をひろめおもをのうしけるふるきこころを
いふ。恵のさ夜ももろうしと日のもとくをとる
ならべて。おもしろきことだちをならびなしといふ。
しろきしきし。おなきへうし。きちるゑの軸(ぢく)なり。
恵いつ(常則)のりてはこちぎ(道風)なれば。い夜めりしうお
りしけるめもかゝやくまでこも。左(右ノ勝之)いはそのこと
もりなし。つぎは伊(た)勢物語ま。正(た)ご位(お此物語今世ニ不傳)をあいきて。まぐ
さぐめやしぎ。これも古いおもしろくまぎりしく
うちつくりよりもじめ。ちうき世のありさ夜を
かきくるいおりしうこどころまさるへいなりし
いせのうこれ(平内傳)ふるき心をこどしずてかりなし

後と浪やけつべきよみつるのあぶことのひさしく
ろひうぶれつゝをされておりひしがるをやらねす
べきとおもひそひるとある。右のまけ
大貳ノ内侍
雲の上にありしひのぼれるこゝろはいそひろの
そこもちゝわそでころ。基俊のこゝろうくさは。
げにそでかれど。さいごく中将のなをばえらく
左勝之
きしとのくにはをぞこや
こゝろめこそうしろれぬらしめとしへうしいせ
とのあみるをやしげめん。かやうの歌ごとくそそ。
ゑぶりがらしくおもそふに一類にとの紫ねせ
つくしてえもいひやらず。ぶあさもちろちろワウ

人どもは志まかりゆかしがれど、冷うへのも家のも
うさたしをぶるえこぶ。いといたうひめきをしうまふ。
涼ふおとぐまいりぬて。うくさりぐまあしそひさんぐ
ころぶへども。おしく見して。詞おちじろは出家は
て。このうちまけさぶめんとのぬひなりぬ。うく家
こともやとうまて見しかれば。中なうまもことなりは
えりとぐめ給へ家まかれすまあしのふるまきは。
おぼ上家ありてとりまぎさせ給へりかり。中は納言もその
出心おさしぬ。このぞの世まはうぐうくおもしろき
うこ志をとくのふることをおめれしこいとなみ
たり。今はあしくあうんことは御いなきことなり。

ぐありけんかぎりなくそとのうまへど。伊納云(以)し人
まもうをで。けりなきまどをあけてうを治めるかな。
悦(朱心)まもうることこうをなて。むめつぼつりし此忍ど
もこてまつしをなへり。としのうちのきち忍ぜ乃。
おもしろくけうあるを。芳のごぜどものとりぐつり
かけうま。延長(えんぎ)の此て(桐壺ノ門)げうしゝとのうろうし路なへ
るまま。まるつが(朱ノ)此世のこともうしをなへるまさうま。
かれ秋家のうぐり治し日の。犬ごくでんのぎしさ。
此心まもうて。おぼしかれぜ。うくべきやうくちしく
おぼきこれて。きん(云聖)もちが門かうまけれるが。いと
いうじきをこてまつしをなへり。そんます(逸)さくうる

ぢんのもとゝまゐるじき心ぞのさ面などいと心ゆめ
うし。れせうそこいたゞこと葉まで。院（朱）の殿ぞよも
さふらふ。左近中将（さこんのちうしやう）をれつゝひまてあり。かれぞぐく
でんのれこしまをゝろ所のかうぐしきは
朱 身こそかく志めれ得かなれそのゝのころの
うちをはせれしもまず。とのゝあり。男も給はざらん
もいとかうじけるければ。秋家ん ろうしく覚しなぐら。男の
れかんざしのもしをいさゝかあり事
秋家 志めれうちは覚うしまあらぬ心ちして神代の
ことも今ぞこひしきどて。葉ぐのうらのかみに
つゝそて来しを給れつゝひのろくなどいとなまゐん

し。院（朱ム）のえうどはしんずうまかぎりなくあれと
おぼしまぞ。おりし世をとりうへさ海ほしく覚し
ける。おとぶ（源池）をもつらしとしひとしえさせ給けむ
うし。ゑ（源ナのうきめあるしるゑ）まし事のはむろひまやまけん。院のはゑし。
（熟成）こさいの家よりつくもりて。（こさでんハ田ノ名ノいうゑれハ之）何の女はの御方よも
おほくまいるべし。内侍のん（朏月）の君もかやうせんは
このましさは人ますぐれて。おりしさき海にとるも
なしけるあつめ給。そのひとさぐめて（絵合なり）。ほはかなる
やうなれど。おりしさき海にもうなうしなして。
ひぐり（秋ニ又）こさ（こさでん）ざの御息ぜもまいしをうまふ。女ぞうの
さつしひ（墓盤下之）おましよそいきて。（右ハ水之 左ハ南之 西ひきこの絵ハ新之）ふられとうぐ

まゐれてさゝしふ。あぶぶへいこうらうでんのすれて
まをのくころよをけてさゝしふ。左れ志るんのそ
こま。すまうのけそく。志きもれまれ。紫地（むらさきぢ）のうらの
ましき。うち志きハ忍びぞめれうらのきなり。けらハ
六人。おかいろまさくらがさるのかぎ。おろ先れ
紅まちぢがさるのとりもれなり。まくがくよういなど
なべてなしぎ三四。右ハぢんのうくま。まんかうの
志さづく忍。うち志きれ青地（あをぢ）の二夜のましき。おし
ゆひのくゝけそくの心ぢへなど。いといまめかし。けらハ
あ浅いろま。やなぎのうぎ。山吹（ぶき）がさねのあこ先
きたりこれおまへまかきころ。冷うへの女房まへ志るも
典侍掌侍志之まへハたゝ

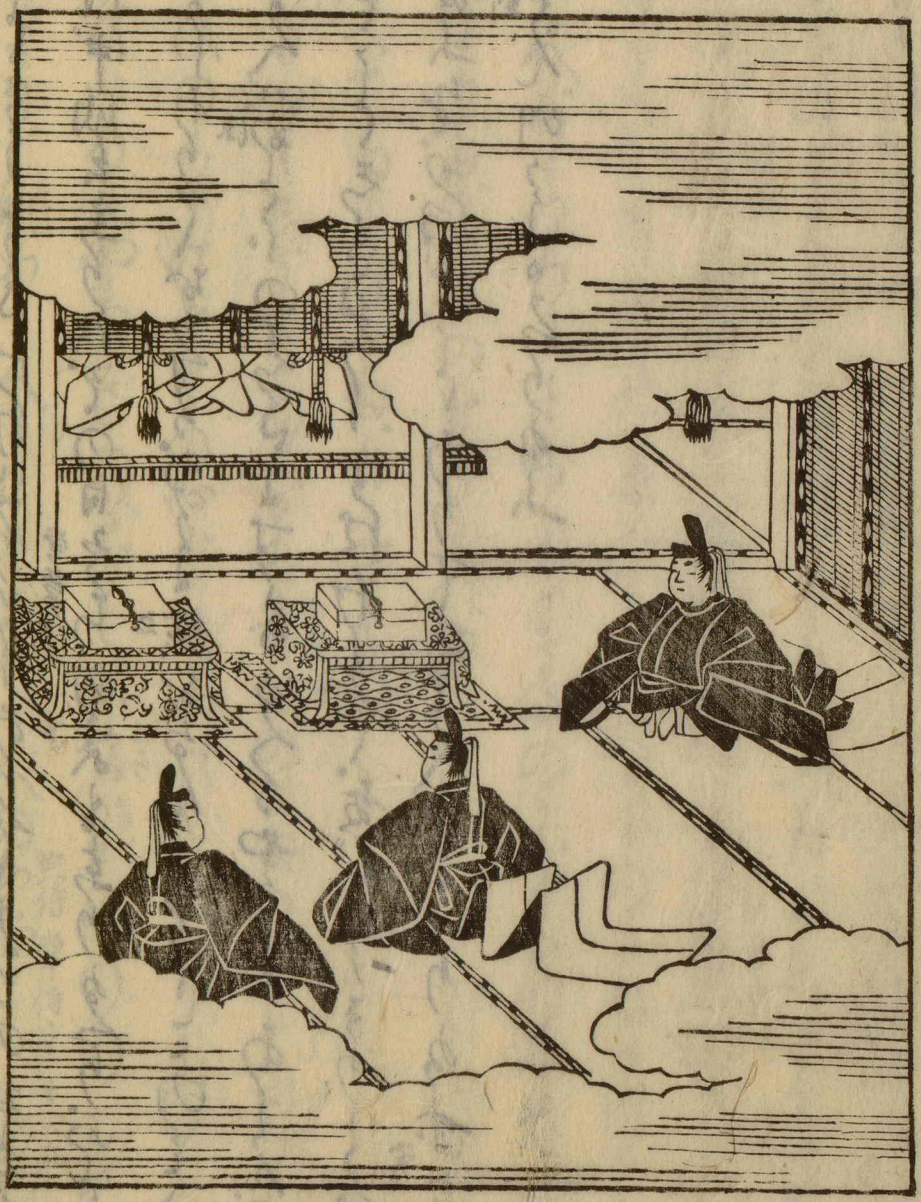
へとさうぞさつけたりめしありてうちのおとゞ

檀中納言来り給ふ その日そちの宮も来りぬ。いと

よしありておもするなるに絵をなんとてこのことさ
まへいおとゞのしるにすゝめぬるやうやあらんこ

とことしさ先しにはあらで。後ぞ了さかしへ
ぬふをおほをごとありておまへにまいりぬふこの

もんけうまつりぬふ



沈 いかにうけはなきけるしなめり忍どもありさる

まえゑぞめやうき絵ちかずれいの宮ゐ氏ゑもいま

しへのぶどどものかましろさうとぐまちさえ

らひつ。筆とりてかしぢりきちかしさう立度さ

とんへるちしとよろはうゑしりぞかりありて。

山水のゆゑゆゑしきさまへをえこそいとかめ地

るれば。さ筆のかぎり人の心はいかりそへられて。

いまれおきうるうもむかしの絵（あと）はまもらぐくつのざ

きくきくおそれおもしろきとえめらすぢいまゐりて。

あら海（朝餉ノ四ノ障子に）のあらそひども。ふるくはけうあり

まどもあらうみ。おそうれいのれきうじをあげて。

中宮（右つぼ）もなりします。ふくしろしめしたるんに
なもふる。おとゞ（源ん）もいというまなげしなひて。どころ
どころのさんども。心もとなきなりくに。時ぐさし
いしへ語けるほどあらまほし。さぐめるて（雲ノ秘判）ある
いりぬ。左なをかずひとりあるもてに。すまのまさ
いでたるに。中納（以）その御心さはだるはり。おなる（こゝさでん）
まも心してさてのまさは心とるもぐれたるを。
えりときなへるるかるいうじきもれて上手（ざし）の。
ころのうざりせひとまして。しげうるうきゑ海
へるは。たとふべきるなし。（雲）こゝよりもじめたて
まつりて。汨とゞめ語はず。その世にころぐりし

うるしとおぼしてほどこりもおりしけん有さ面
此心よおぼしけんことども、こゞ今のやうにこゝ也、
所のさ面おぼつるさうこくいそのくれなく
うきあらりしこまへりさうのまゝかんなれ所ぐる
うきまぎてさ面のくもしき日記にはあらぜ、衣
なり前などもまじれりこゞひゆりしうこれもこと
ことおぼさず、さ面ぐの此絵のけうこれにこれ
うつりしてくおそれにおもしろしよろづこれを
しゆづりてひごろ所になりぬ、夷あそかく
ちくなり所どる、拙いとおそれにおぼされて此
うそしけるどまいりつゐでにむかしの此拙絵ども

いでこそ。ふしけるに、ほどようりぐくもんまうろを
われて待しは。すゝしもざえなぢつゝめぐべくや店
らんどけん。院乃のてまうしやう。さいうくとい
かまれ。せるいとをもくするもれちれば、やおらん。
いさゝすゝめゝ人の命とさいちりとちうしびめかは。
いどぐろくこまれるなん。それらくむまれ。さら
でも人のおとろまじきほどまで。おれがちるまゝれ
こちあくるしひそとりさめさをかひて。ほん
ざいのくらぐの。地ごしへさを給しは。りてなるさ
ことまちく。まうらうてくけこと心うくことも
待ござれ。おくこと のこなん。おやちくこなるさ

拙くうつしては心ゆくばかりなることこそあれ
べきことなれ。なほおもしろき。あはれなる山がはに嶮
て、よきみえうつの書きさまをならはずして
よしあしをわかつことも。筆のゆくばかり
ありてこそよけれ。心ゆかずなんおぼえなん
られしとぞ。なほそのなんなきすべきことなり。ば
かうすなはちやうなるのちの書しやおもんと。
さこはなかんば。みな〳〵のがしまことにあらて。
あるべきわざなり○ど。ことにこそもの
あり。ま○びどころおもんぱかりのことおきうと
あり○ど。それづからけんまたなりぬべし。筆

とろこちとごうけことぞおやしうむしぬれ
はぐこゆるをかきらうなくこゆるをれ抱もさう
べきまてかきうけさぐひもいでくれどいほのこの
中にはなを人にぬけぬる人のなるごとをもこのこ
えけるとぞこゝろ院の此まへにてこゝろち酒
靴(くつ)をいづれかはさ面ぐとりぐのざえをまうもせ
給はざりけんその中にもとりてこゝろ此(ほう)こゝろに
いれてつゝへうけとしをこまへるかひありてもん
ざいをばさう抱にていとずさしぬことの中には
琴(きん)ひかをぬふことなんいちのざえにてつぎる
もよてぶえ琵琶(びわ)さうのことをなんけぎくつり

ちゝひなへるとうへもおぼしのこまをきせの人
志かおもひ罪しさをこうを思ハなを筆のつゞでに
すさひさをなふおぼこしとこそしひこまへしかど
いとうまさるまさまでいふへのすゝがさのぶる
ぜ説をくうるしのべかるハかへりてハしかゝぬけざ
なりとおぼえて罪しなひて思ひなきにや院の御
こと罪し出ておしほれなれ女余日の月指出てこ
なるハまざさやかなるのどたるの中おりしき程なる
ほかんのつきの御こともし出て程中納言ばん給ハり
給さハいへど人にハまさりてかさこそなへり言こさうの
御こと おとゞきんびたくかねの令嫁つうまのるうへ

べの中ましてゞれたるを百(ゆ)てゞそうし給ひ候。いうじう
面白しおけたつるまゝに花の夏も人のれかたちも御の
うまこえて鳥のさえづる程心ちゆきめでたきあさ
ぼらけやゝろくぜハ中(若つが)夏の此方より給ひ候。(雲)こゝハ此ゞ文
をもて給ひ給ひ此のことまハ此恩の定(さだめ)をしまふ。
これらしくのまきハ中(若つが)夏にさふしいをまへとまて(源ノ)
さを給ひれバこれがたじめ文のたりのまきくゆ(若つが)し
がしをまへど今(源羽)つぎくまと罪しさを給ひ(冷)うへにも此心
ゆりをまて見しめしたるを嬉(うれ)しくこなり給ひ候
きことにつけてもかうもてなし罪しまへバ種(ほん)中納言ハ
私おぼしをさるべきまやと心やまもう見さるべきあるも

冷う人の出心ざしいもとよりおぼしきこゝろ（こきでんな）それだれ
こゝろやうなおぼしこゝろ、こゝろを人（ひと）されぞこなりなて
ぞこれもしくさりともとおぼされけるさらぬ（冷ん）さ
節（せち）気だにも此出時よりとすゑの人のいひいふ
べき例をそへんとおぼし、いさゝしざ海のかくな
ちなきれあそびもめづらしきすぢにきさせ給て、
いとじきさりの出世なり、おとゞ（源ん）ぞなをつねなき
ゆるよをそして、今すこしおとなびかりしますと
こなりてなほ世をそむきなんと、かくおもほを
べるめる、芳のこゝろしをこさくにもよろひこゝろで
つきくゝねこゝくのぞりせるぬけぬるひとれ。

なぐいえるもあれ口ざなりけり。此此世にハ身の程
えしすぎなるより。中ごろなきなりて。志づえたりし
うれへにかりて。今までもなぐしふるなり。いまより
のちのさうえハなをいのちうしろめたし。志げかり
こもりぬて。後の世のことをしるめ。かしたしよもひ
とものべむとおぼして。やまざとのどかなるを
しめて。こぐうしくらをぬふ。仏經（おとけきやう）のいとなミをへて
をさせ給めるに。すゑの君ぐちしふさ面にうしげき
いぐしてえんとおぼしめすまぞ。とくすて給へん
ことをうたげなる。いるおぼしをきけるにかと
いとしりがたし

69038
6AP78